# メンタリングについての考察 [1]

私は、各家庭が人的資本や知的資本を維持・拡大できるよう支援する中で、生涯にわたる学びを成功裏に実践してきた人々の物語を探しています。 私が関心を持っているのは、アリストテレス的な幸福の追求において成功した人生の歩みを体現している人々です。こうした人々を研究する中で、私は彼らの言葉や行動を通じて、人生の学びの旅路における各段階での成功を、自分を助けてくれたメンターたちのおかげだと多くの人が語っていることに改めて気づかされます。私自身も幸運にも人生でメンターに恵まれてきたため、彼らがそのように成功の要因をメンターに帰する考えがどれほど正しいか、容易に納得できます。

成功するメンタリング関係の基盤とプロセスとは何でしょうか。古代ギリシャ人には、「弟子が準備が整えば、師は現れる」という格言がありました。私の経験から言えば、ギリシャ人のこの言葉はまさにその通りです。 私の実践の中で、ある種の魔法のような形で、これから弟子となる人が学ぶ準備ができたと宣言すると、確かに師が現れることを繰り返し実感しています。さらに、その「準備ができた」という言葉の奥底には、師匠の弟子となる覚悟を持った人の真の謙虚さ、そしてそれとともに、他者の知恵を尊重する能力が宿っていることに気づきます。 成功する人生にとって不可欠な美徳は、傲慢の対極にある「謙虚さ」であると、私はますます強く実感するようになった。謙虚さがあるからこそ、人間は自分が知らないことを自覚し、自分の疑問に答えを与えてくれる、いわゆる「師」と呼ばれる人々を求めることができるのだ。この探求のプロセスは、古くからあると同時に、極めて現代的な儀式である。私の考えでは、この儀式こそが、あらゆる成功する学びの取り組みに先立って行われなければならない。

学びは、ソクラテス式の問いかけ法を用いることで最も効果的に行われると私は信じている。教師から答えを提示してもらうことも有益だが、問いかけを通じて教師に導かれて答えにたどり着くことで、学習内容の定着が深まる。問いかけを行うことで、学んだことが生徒の「実用的な記憶」に定着する可能性が格段に高まるのだ。

優れたメンターは、教師とは異なり、答えを提示することはほとんどありません。むしろ、

メンティー一人ひとりにとって独自の学びへと最も効果的に導くと信じる問いを提示しようと努めるのです。
メンティー一人ひとりに固有の学びへと導くと信じる問いを、メンティーに提供しようと努めます。メンティーの質問に対するありきたりな答えは、メンティーの教育全般には役立つかもしれませんが、メンティーがすぐに自分の生活に活かせるような有益な学びにつながることはめったにありません。成功したメンタリング関係は、メンターの技を通じて、メンティーが自分だけの、生涯を通じて活用できる学習プロセスを発見するよう導きます。他者がどのように学ぶかではなく、「自分がどのように学ぶか」というプロセスの発見こそが、あらゆる優れたメンタリング体験に見られる深い学びなのです。

メンタリングの基礎とプロセスを理解したところで、では、どのようにしてメンターを見つければよいのでしょうか？

**まず**、メンティーは自分自身に問いかける必要があります。人生のこの段階において、自分は一体何を学びたいのか？それは知識の体系なのか、それとも自分自身に対するより深い理解なのか？言い換えれば、人生の旅路において、私は今、自分の知性や世界における役割についてより深く学び、外の世界に目を向ける段階にあるのか、それとも直感や内なる自己についてより深く学び、内面に向き合う段階にあるのか？ 多くの場合、私たちは何か外的なものを求めていると思い込んでいますが、実際には内面で変化が起こっており、まずそこに目を向けるべきなのです。多くの神秘主義の伝統は、知性は直感の産物であり、私たちの心は精神の反映であると教えています。 私自身の人生においても、知性が「人生の岐路に立っており、決断を下さなければならない」と告げる時、実際にはすでに直感を通じてその問いへの答えを出しており、ある道をかなり進んだところで、遠ざかっていく岐路を振り返っていることに気づくことがよくあります。私たちが本当に問いかけていることが何なのか——それは外的なものか内的なものか、知性の問題か精神の問題か——を理解することは、メンティーとしてどこでメンターを探すべきかを知る上で極めて重要です。

**第二に**、メンティーが答えを求めている問いを明確にした後、メンターを見つける上で次の重要な段階は、最も信頼できる人々にその問いを投げかけ始めることです。メンターを探すこの旅路において、メンティーは弱さをさらけ出す勇気を持たなければなりません。メンティーは、他人に助けを求めることに対する自然な不安や、助けを求めると生じがちな「借りを作る」という恐れを

。メンティーがこの「身を委ねる」という行為を意識的に拒み続けている限り、その人は真に学ぶ準備ができておらず、私の経験上、メンターは現れないでしょう。メンティーがこの恐れを手放し、メンタリングを成功させるために必要な他者への意識的なコミットメントに心を開いたとき、メンターは現れるのです。 なぜそうなるのでしょうか？　それは単に、私たちが最も信頼する人々、つまり内輪の人々が、私たちが次の学びを受ける準備ができた時を察知しているからです。私たちがその学びを真に始めたいと彼らを納得させることができれば、彼らはメンターを見つける手助けをしてくれるのです。

多くの場合、このプロセスの初期段階では、メンティーの内輪の人々も、メンティー自身と同様に、どこでメンターを見つけられるのか見当もついていないものです。しかし、協力し合い、どのグループにも存在する多様な外部の人脈を活用することで、メンターはほぼ必ず
見つかるものです。今日の世界では、社会が活用できる情報システムによってこのプロセスは容易になっています。そのようなシステムが存在しなかった時代、小さな町や村に住む人々にとって、このプロセスがどれほど困難だったか想像してみてください。メンターを探す過程で、私は「親しい仲間がいない」と主張する人々から頻繁に難題を突きつけられます。しかしこれまでのところ、それが事実ではないことが常に判明しています。 どのケースでも、いくつかの穏やかな質問を投げかけるだけで、助けになる人々のリストが浮かび上がってくることに気づきました。そのリストは、助けを求めることへの不安によって、メンティー自身から隠されていたかのようです。繰り返しになりますが、助けを求めなければ学びの旅を始めることはできません。助けを求めることこそが、学びが生まれるための決定的な行為なのです。

**第三に**、メンターとメンティーが互いの関係を尊重することで、新たな疑問が生まれるにつれて、その関係が拡大することもあり、実際によくあることです。最終的には、メンティーの生涯にわたる学びの旅は新たな課題へとつながり、それには異なるメンターが必要となるでしょう。この考察の冒頭で、私は古代ギリシャの格言「生徒の準備が整えば、師は現れる」を引用しました。 ここで、私自身の言葉を付け加えたいと思います――「弟子が準備が整えば、師は姿を消す」。成功するメンタリング関係はすべて、始まった時と同じ調子で終わることに依存しています。私が知る偉大なメンターたちは、メンティーが次の段階へ進む準備が整い、自分たちが提供した学びが達成された時を、常に本能的に見極めているようです。

こうした偉大なメンターたちは、偉大なチェスの名手が常に3〜4手先を見据えているのと同じように、関係に終止符を打つための道を整えておく。メンティーにとってこのプロセスは不透明なものだが、継続的な学習プロセスが適切な結末を迎える前に中断されないためには、そうあるべきである。時には、メンターとメンティーの関係の終わりは波乱に満ちたものになることもある。これは、真の学びとパートナーシップが生まれるほど深い関係が終焉を迎える際の、避けられないリスクである。偉大なメンターは、特定のメンティーにとっては、その精神が関係から解き放たれ、次の段階へ進むためには、嵐のような別れこそが唯一の道であると判断することさえある。しかし、関係がどのように終わろうとも（抱擁と手を振る別れは、涙や脅しよりも確かに望ましい）、メンターとメンティーは、関係が始まった当初から、その関係がメンティーの生涯にわたる学びの旅の性質上、一時的なものであることを常に認識しておく必要がある。 この関係の一時的な性質を最初から認識しておくことが、その関係を成功裏に終えるための最大の保証となる。メンティーにとって、自身の旅路のさまざまな段階に対応するために多くのメンターが必要になるという認識は、この関係において極めて重要な要素である。メンターにとって、真の教師という甘くも苦い役割を自覚することは、メンティーがメンターが提供できるすべての知恵を吸収するために必要な客観性を保つ上で不可欠である。 メンティーが自分を選んでくれた、その唯一無二の学びのプロセスに全身全霊を捧げつつ、いずれメンティーが次の段階へと進むことを理解しているメンターこそが、真のメンターである。親のように、メンターは仲介者であり、人生の旅路に向けて問いと知恵を授ける存在だ。私の人生経験から言えるのは、成功したメンタリング関係こそが、人間同士が築き得る最高の関係であるということだ。 双方は、完全な信頼と、成功の可能性への信念を持ちつつも、その確実性を前提とせず、知恵を求める初心者の深い謙虚さと、自らの無知を痛感する賢者のさらに深い謙虚さを携えて、この関係に臨まなければならない。

私がご家族と関わる際、共に歩み始めるにあたって、各ご家族の方々に答えを求めている質問が2つあります。「何に情熱を注いでいますか？」そして「あなたのメンターは誰ですか？」という質問です。

最初の質問は、家族の一人ひとりが歩むべき独自の道を見出すことを目的としています。2つ目の質問は、各家族

その段階に必要なメンターがいなければ、生涯にわたる学びの旅を成功裏に歩むことは誰にもできないと確信しているからです。 マケドニア王フィリッポスは、アレクサンドロスをマケドニア王として育てるために、アリストテレスに師となるよう依頼した際、この事実を理解していました。フィリッポスは、父親としてアレクサンドロスに教えられることはすべて教えたと知っていました。その若者が旅の次の段階へ進むためには、メンターが必要だったのです。フィリッポスは、アリストテレスを選んだことで、そのメンターが少年を単なる王だけでなく、世界の皇帝、アレクサンドロス大王へと変えることになるとは、夢にも思わなかったでしょう。

メンタリングは天職である。メンターを探す際は、その役割に天職を感じている人、そして何よりも、あなたの人生のその段階特有の問いに対して天職を感じている人を探すべきだ。多くのことを知っているとほのめかす人には警戒し、あなたの直感を通じて「多くのことを知っているようでありながら、自分はほとんど知らないと公言する」ような人に惹かれるようにしよう。

**Copyright ©1999 by James E. Hughes, Jr.**

---

[1] 本稿を、私や他の多くの人々に数多くの深遠な問いを投げかけてくれたジョン・オニール氏に、感謝の意を込めて捧げたい。